令和３年３月３０日

令和２年度自己評価結果公表シート

幼保連携型認定こども園せんりひじり幼稚園・ひじりにじいろ保育園

1、本園の教育目標

園児一人一人の存在そのものを尊重し、個性を大切にする教育により自己肯定感を育てると共に、人と関わる良さ、自然と関わる良さを十分に経験し、意欲的に力強く生きる力を育てる。

本年度、重点的に取り組む目標・計画

これまでの自己点検・評価の結果や年度末の保護者アンケートも踏まえて下記の点について重点的に取り組む。

1. 教育・保育課程の見直し。
月ごと行事ごとに子どもの育ちの姿を抽出し、期ごとの育ちや力を整理する。育ちのつながりを探り環境や関わりのあり方を考え、教育・保育の充実を図る。

2. 2，3歳児の接続。
にじいろ保育園からせんりひじり幼稚園への入園が、こども園として段差のないものにするための連携の在り方や環境の工夫を図る。

3. 子どもの運動能力の向上を図る。
屋外環境を工夫し、日々の遊びの中で多様な運動ができるように活動内容を見直し、運動能力の向上を図る。

4. 園の保育理念の理解推進を図る
ドキュメンテーションやポートフォリオに加え、ICT システムを利用した保護者への配信システムを使い、保育の取り組みや子どもの育ちを可視化し、保護者の理解を深める。保護者と子どもの育ちを共有し、共に育ちを支える。

2、評価項目の達成及び取組状況

評 価 項 目	取 組 状 況
1、 0歳～6歳の担当者がそれぞれの年齢の発達における課題や特徴をまとめるための話し合いの場を持ち、6年間の育ちを見通した教育・保育課程を作成する。	昨年作成した期案と、今年度のこどもの姿に齟齬がないかを確認し、修正が必要な場合は修正または追記し、次の期の計画につなげた。
2、 2，3歳児の接続を段差のないものにし、安心安定した幼稚園生活に移行できるように、環境を工夫する。	昨年同様、2号の子どもの保育室を預かり保育の部屋の隣に配置。午前と午後の生活の移動がないように、変化を最小限にとどめた。日常生活での交流を持ち、遊びを通して、子ども同士の関わりを充実させた。
3、安全な環境の中で、日々の運動の機会を増やし運動能力の向上を図る。	コロナ禍の中での運動不足を補うために、正課の体操をやめ、園庭またはホールに運動コーナーを常設し、日々の遊びの中で体を使った活動ができるように充実させた。3歳児の「がんばのもりマスター」4歳児の「縄跳び頑張りカード」、など、できるようになったことを自分で確認できるように工夫し、個々の次への意欲につなげた。5歳児の運動検査を実施し、家庭の生活調査との関連性を検証し、結果を報告、各家庭と

	の連携も図った。
4. 園の保育理念の理解推進を図る	従来のドキュメンテーションやポートフォリオに加え、今年度もICTシステムを利用し、日々の子どもの様子を写真で保護者に配信した。また、ホームページ担当者を採用し、保育の様子を日々更新したことにより、活動内容を保護者に伝えることができ、保護者の理解が深まった。様々なことをタイムリーに発信することで、保育活動やPTA活動においての保護者の協力が多く得られた。また、子どもの育ちを共有し、共に育ちを支える姿勢も見られた。

3、学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

コロナ禍の中で、感染対策を第一優先事項としながらも、子どもの育ちを支えていくために、活動や行事のありかたを大きく見直した一年だった。年度当初は、緊急事態宣言で登園が制限される中、エッセンシャルワーカーの子どもたちを預かる一方で、在宅の家庭との関りを繋いでいくために、様々な取り組みを試みた。ICT を使い家庭で過ごしている子どもたちに遊びや園の紹介を100本以上発信し、双方向の関りをするためにZOOM幼稚園をするなど、職員でできることを話し合い積極的に取り組んできた。行政や教育関係者から、その手法の紹介を依頼され、全国的にも発信する機会があった。また、休園中の職員には、ひじり学園のフィロソフィーの確認、自己研鑽のための研究の機会にあて、開園後の保育の充実に向けて資質向上に努めることができた。

登園再開後、例年と違う子どもの育ちそびれや、コロナ情報の影響とみられる不安症も見られ、子どもの状況に寄り添いながら、様々な関わりの中で子どもの育ちを後押ししていった。行事は様々な感染対策をしながら、学年ごとの開催や、場所を変更して園での宿泊保育など、すべての行事の形を変えて実施することができた。それら全てのことが、結果的に子どもの豊かな育ちに繋がり、例年以上に、子どもたちの非認知的能力の育ちにつながったことを振り返り、来年度も、行事や活動の形を変えて、子どもの育ちを支えていくことを考えている。

また、本年度も、1年間を通して子ども理解を中心とした園内研修や支援児のカンファレンスに取り組み、個々の保育者が子どもの思いを理解することから、環境の構成、教材の準備、保育者の関わり等を考えていくことができた。また、非常に見えにくい幼児期の育ちを家庭と共有するために様々な方法（ポートフォリオ・ドキュメンテーション・ICT システム・コンセプトブック等）により伝えていった結果、個々の子ども育ちを良さとして肯定的に観ると共に3年間の育ちのイメージを共有することができた。また、ホームページの「今日このごろ」を日々更新することにより、保育内容や子どもたちの活動の様子を保護者に伝えることができ、園の日々の活動に対する保護者の理解が深まった。

コロナ禍の中の園の取り組みが、保護者より高く評価され、アンケート結果の高評価につながっていたと思われる。年度末に実施した全家庭対象のアンケートでは、「1. せんりひじり幼稚園の教育について・・・」の設問で「とてもよかった」・「よかった」の合計が 100%という結果になった。今後も子どもの育ちを可視化し、各家庭へ教育内容の理解を図る努力を続けていきたい。

今後も、子どもの育ちから始まる保育計画を立て、人生の基礎を培う幼児教育の重要性を常に意識して教育の質の向上に努めていきたい。

5、今後取り組むべき課題

課　　題	具体的な取り組み方法
園の保育理念への保護者の理解を推進	引き続きキッズリー等のICT配信媒体を活用し、保育内容や方針を可視化して伝えていくことにより、保護者の保育に対する理解を深める。
子ども理解に基づくカリキュラムマネジメント	引き続き、月ごと行事ごとに、子どもたちの育ちの姿を抽出し、期ごとに育ちや力を整理し、計画につなげていく。
表現の育ちを豊かにする保育活動や教材の研究	絵画活動や音楽・表現遊び等の育ちを豊かにするための素材や題材や保育内容を見直す。
仕事の効率化	保育者間で、タイムリーな情報の共有や計画や作業のスリム化を図るためにICTシステムを充実させる。

6、学校関係者の評価

- ICT システムを使って小まめに子どもの様子の配信や、ポートフォリオ、園だより、ホームページ等様々な方法での発信のおかげで、保育内容や教育方針の理解が深まった。
- コロナ感染防止のために、様々な行事のありかたを工夫したことが、子どもの豊かな育ちに繋がり、保護者からの信頼を得ることができた。
- コロナ感染防止のためにPTA活動をスリム化したことで、保護者の負担感は減少したが保護者同士の関係性を築き、子育てを支え合うという点では、今後の課題となる。
- ホームクラスの利用希望者が増加し、新2号というシステムもでき、一般の保護者は利用しにくい現状が一層強くなった。ホームクラスでの生活内容を見直し、より多く利用できるような工夫が必要である。

7、財務状況

公認会計士による年間4回の監査において、園児募集が順調であり、耐震化に伴う大規模改修、建て替え工事のための借入金も順調に返済が進む等、財務状況は良好であるとの指摘を受けている。